

アメリカ史と動物研究の展開

丸山雄生

American History and the Progress in Animal Studies

MARUYAMA Yuki

1. はじめに

動物は歴史学にとって古くて新しいテーマです。人間と動物の間にある長くて深い結びつきからすると、人間の歴史を考えることは動物との歴史を考えることだと言ってもいいかもしれません。ラスコーの動物壁画にあるように、歴史が文字によって書かれる以前から動物は人間の近くにいて、動物の表象は人の行動や感情を伝えていたわけですから。しかしながら、動物は歴史の対極でもありました。ニーチェの有名な一節を借りれば、「動物は非歴史的に生きる」ものです。人間は書き残し、語り伝え、思い出すのに対して、動物は子供と同じで過去と未来の間の現在しか持たず、「言おうと思うことをすぐに忘れて」しまい、しかもそのように「答えることももう忘れてただ黙って」しまいます（「生に対する歴史の功罪」、『ニーチェ全集』（白水社、1980）、118-9 頁。）。歴史とは人間と動物を分ける諸条件の一つであり、言語を用いて記録し、過去の重荷に耐えることが人間の人間である所以だというわけです。

こうした人間の特権的な立場、人間のみに許された特別な力という考えには、近年疑いの目が向けられています。はたして人間だけが言語や理性を持っているのでしょうか。動物はほんとうに語ることも、自らを表すこともできない貧しい生き物なののでしょうか？ 人間と動物の間には乗り越えることのできない決定的な違いがあるのでしょうか？ 結論を先取りすると、今日の歴史学ではこれらの問いに否定をもって答えるでしょう。人文学（humanities）が人間を中心に置く知だったとしたら、人間の特別さ自体を歴史化しようとするとき、人間以外の存在、非人間的な動物が主題として浮かび上がります。動物が現代の歴史学にとって重要なのはこのためです。そこで、この発表では、「人間・動物研究（human-animal studies: HAS）」と呼ばれる分野の知見を参考にしながら、アメリカ史を軸に歴史学全般における動物のヒストリオグラフィーをたどります。動物は様々な分野で活発に論じられるようになっていますが、それはポップな流行にはとどまりません。動物が歴史学の中心的な課題を占めることを確認するのが、この発表の第一の目標です。その上で、動物の歴史を書くにはどうしたらいいか、あるいは動物の歴史学はいかにして可能になるかという、一見不可能な問いについて考えてみたいと思い

ます。

2. 社会史と動物

動物の歴史学の最初の波は 1960 年代、社会史によってもたらされました。国家を単位とする歴史では、政治や戦争のように大きなトピックが巨視的な視点から語られます。しかし、そこで想定される国民とは均質的に一体化されているわけではありません。人種、民族、階級、ジェンダー、宗教、言語、地域など細かく分かれた複数の関心が重なり合っています。個々の集団に注目し、マクロではなくミクロの視点から歴史を考えようとしたのが社会史でした。それはしばしば「下からの歴史」と呼ばれます。国民の主流に位置付けられてきた人々、たとえばアメリカなら白人で男性でプロテスタントで中流以上の階級で異性愛者だった人々が「上から」の視点だとすれば、対照的に伝統的な歴史学では見過ごされてきたマイノリティたちに焦点を当てて、マイナーな立場からの回復を目指しました。

社会史は社会運動と連携して大きな成果をあげました。1950 年代以降の公民権運動の盛り上がりは、隔離政策の撤廃や人種平等の実現を求める社会変革であるだけでなく、黒人を排除してきた歴史の書き直しでもありました。少数の白人の支配者層を主役としてきた歴史において、奴隷は人格を認められず、受動的な「客体」でした。それに対抗して、聞き逃されてきた奴隷の声を拾い上げ、無名の大多数ではなく、一人一人の個性ある独自の人格として、歴史の主役に据えることが社会史の課題でした。そうして奴隷の生活や労働の細部を再現し、奴隷制の不正義や非人間的な実態を明らかにしたとき、黒人は主人の慈悲にすぎるだけの無力な存在から、活発に声を上げ、差別や抑圧に抵抗し、自らの力で自由への道を切り開いてきた積極的な主体に転じました。マーティン・ルーサー・キング、バスボイコット、1963 年のワシントン大行進、1964 年の公民権法、人種統合教育などの改革の背後にあったのは、こうした新しい黒人史の認識でした。

1960 年代から 70 年代は女性運動の時代でもありました。第二波フェミニズムは女性の解放を掲げ、家事や育児など女性に課せられてきた伝統的な役割の不合理を批判し、女性の社会参画を推進しました。それにより女性史も大きく発展します。「歴史 (history)」ということばは男性の物語 (his story) であることを暗示しています。アメリカ独立宣言には「すべての人間は平等に作られる (all men are created equal)」という有名な一節がありますが、人間を男性の複数形で言い表すとき、女性は後景に退きます。女性史は、このような男性中心の歴史の書き直しでした。第二次世界大戦後の 1940、50 年代に頂点に達した家庭神話で賞賛されたのが、郊外の戸建て住宅で炊事、洗濯、掃除など家事に勤しみ、子供に愛情を注ぎ、夫に愛される美しい妻という一面的な女性像だとしたら、そこで生まれ育ったベビーブーマーたちは親世代のジェンダー規範を痛烈に批判しました。男性や家族に奉仕する飾り物という従属的な立場にとどまるのではなく、自立的な主体の獲得を目指したリブや女性史は、憲法に男女の平等を明記する修正条項 (ERA) こそ不成立に終わったものの、広範囲で社会経済的な力の拡大を実現しました。

労働者、黒人、女性のみならず先住民や移民など様々なマイノリティ集団による社会史の流行は、動物や自然など人間以外のものにも波及します。ロ德里ック・F・ナッシュはその動きを「自然権 (natural rights)」から「自然の権利 (rights of nature)」への移行として説明します。自然権が人間が自明のものとして持っている自由や平等などの諸権利だとしたら、近代化とはそれが限られたエリートたちのものから広く人間一般のものへと拡大されてきた歴史でした。いささか単純すぎる図式ですが、白人男性エリートたちが独占していた選挙権が、労働者へ、黒人へ、移民へ、女性へと普遍化したのはその一例です。ナッシュはその先に自然を見据えました。「倫理学は、人間の占有物であるという考え方から転換し、むしろ、その関心対象を動物、植物、岩石、さらには、一般的“自然”あるいは“環境”にまで拡大すべきである。」(ロ德里ック・F・ナッシュ, 松野弘訳『自然の権利 環境倫理の文明史』(ミネルヴァ書房, 2011), 4頁.)

「自然の権利」という思想は突然登場したものではなく、「ナチュラリスト」と呼ばれた人々により長らく育まれてきたものでした。ウォールデンの森に家を建てて独居する実験を行ったH・D・ソローは、人間だけでなく森やそこに生きる動物たちの間にヒエラルキーや格差を認めない「拡大された共同体意識」を発見しました。ウィスコンシンからメキシコ湾までアメリカを徒歩で縦断し、ヨセミテやシエラなどカリフォルニアの山々の保護や国立公園の制定に尽力したジョン・ミューアは、自然を人間に奉仕させる人間の利己性を批判しました。19世紀末から登場する自然の「保全 (conservation)」という考えが自然資源の利用価値の最大化を目的としていたのに対して、ミューアにとって自然の美は人間の利益を超越するものでした。「山の身になって考える」ことを試みたアルド・レオポルドは、人間もそのほかの動物も自然に対して平等であり、相互に依存しており、等分の義務を負っているという土地倫理を提唱しました。これらの伝統を踏まえて、20世紀後半以降の環境倫理の発展の契機となったのは、1962年出版のレイチェル・カーソン『沈黙の春』でした。19世紀の奴隷制廃止運動にとって『アンクル・トムの小屋』がそうであったように、殺虫剤 DDT による自然破壊を告発した『沈黙の春』は、昆虫も含めたあらゆる生物への倫理的配慮を要請することで、環境問題への関心を高めました。DDTのみならず公害や資源枯渇など環境が危機に瀕したとき、ディープ・エコロジーをはじめとして地球や生態系全体を考える脱人間中心主義的な思考が唱えられるようになりました。

ピーター・シンガーを嚆矢とする「動物の権利」論もその一つです。シンガーは、自身の考えが社会史の影響下にあることを明言しています。彼の主著である『動物の解放』という表題は、「人種や性のような恣意的な特徴にもとづく偏見と差別に終止符を打つことを求める」解放運動を背景にしています(ピーター・シンガー, 戸田清訳『動物の解放』(人文書院 2011), 15頁.)。もともと、人種奴隷制と動物の間にはアナロジーがありました。奴隷が主人の資産であり、権利を持たないモノであったように、動物もまた荷役や農作業など人間の役に立つべき道具とみなされていました。どちらも暴力や恐怖により調教され、食料や生活環境を奪われることで主人に依存せざるをえなくなります。両者の立場の近縁性を考えると、19世紀後半以降の奴隷制廃止運動と動物愛護運動が軌を同じくしていたことは不思議ではありません。その二つを結びつけたのは、人種奴隷制の非人道性や動物への暴力に対する嫌悪であり、苦しむ人や動

物の痛みへの共感でした。その担い手となったのは、キリスト教的な博愛の精神や共感の輪を拡大するセンチメンタリズムを奉じる中産階級からエリート階級の女性たちでした。またジェレミー・ベンサムらの功利主義は「動物は苦しむか？」を基準として動物への危害を認めませんでしたが、それを受け継ぐシンガーの動物の権利論では、利益に対する同等の配慮という基本原則は人間も動物も分かつことはないといわれます。人種差別（racism）、性差別（sexism）と同じように種差別（speciesism）もまた平等な配慮の観点から否定されるわけです。

社会史により動物に関する議論は活発化しました。キャロル・J・アダムズの『肉食という性の政治学』が、家父長制、人種差別、性差別、富の分配の不平等など大きな社会的不正義の結節点としての肉食の弊害を指摘したように、動物の問題はそのほかのマイノリティの自由や平等と連帯していました（キャロル・J・アダムズ、鶴田静訳『肉食という性の政治学 フェミニズム—ベジタリアニズム批評』新宿書房、1994.）。社会変革としての側面においては、グリーンピースやPETAなどの動物保護団体による解放運動が勢いを増し、畜産、食肉、動物実験、皮革製品、ペットなど人間の身の回りのあらゆるところに遍在している動物の搾取に対して、直接行動も含めて積極的な抗議を行いました。

以上のような 60～70 年代に始まる社会史的な動物理解には問題点も指摘されています。一つには、動物と人間の関係を単純化していました。「下からの」視点はヒエラルキーの存在や抑圧の働きを可視化しましたし、権利の回復やリドレスを達成するのに有用でした。しかし、この構図では被抑圧者の抵抗を際立たせませんが、それ以外の選択や行動は覆い隠されます。動物は人間に常に抵抗していたわけではありません。人間と動物の間には、抑圧／抵抗では割り切れない複雑な力学、緊張や敵対や協調を含みながら変化する双方向的でダイナミックな関係があったはずです。第二に、社会史のなかで動物が占める役割は人間に比べて小さなものでした。社会史の理論的基盤となったマルクス主義の唯物論において、動物のように働かされる労働者は主役ですが、動物そのものは主役ではありません。自立心と独自の文化を持ち、積極的に発言し、行動した労働者たちの主体性が「下から」の視点だとしたら、自らを語るができず、行動を記録することもできなかった動物には同様の主体性は認められませんでした。あるいは逆に、動物を対象とすると、過度にロマン化されることがありました。すなわち、動物は人間の対極にあり、人間が失った無垢や純粋さを保持している理想だと美化されました。それは現実というよりはあこがれを込めたファンタジーであり、動物や自然の回復を目指すのではなく、それらを美しいけれど人間とは全く異なる新たな他者として位置付けました。同情や共感により動物の搾取に反対するとしても、それはなお動物と人間を切り離して、二項対立の枠組みで理解していたのです。

HAS の第一人者であるエリカ・ファッジによる動物のヒストリオグラフィーでは、こうした動物の社会史を、「人間的な歴史（humane history）」と呼びます。それは、「常に人間によって書かれた文書史料のなかで描かれているものとして動物をまなざし、よって人間についての何かを明らかにする」歴史です（Erica Fudge, “A Left-handed Blow: Writing the History of Animals,” in Nigel Rothfels, ed., *Representing Animals* (Bloomington, IN: Indiana University Press, 2002), 8.）。それは動物についての歴史ではあっても、動物の歴史ではありません。

ません。人間が書き残した史料に基づき、人間社会の変化を解き明かすことが目的なのであって、動物は歴史を考えるために役に立つ道具のひとつとして使われたのです。

3. 動物論的転回以後：人間と動物の関係史

社会史の達成と限界の後の新しい動物の歴史学は 1980 年代以降に、言語論的転回や文化論的転回をふまえた「動物論的転回 (animal turn)」として現れました。いわゆる転回が、意味は自然に生成するという自明性を疑い、逆に言語など記号を媒介として作られた人工物であると考えたように、動物論的転回もまた人間と自然の間の区分を再定義しました。人間とその文化に対して、人間が関わっていない根源的な原初性を自然や動物に与える考えでは、文化と自然、人間と動物は二つに分断されます。この二分法では、中心である人間に対して非人間的なものは周縁化され、自然に対する文化の優越が導かれます。自己と他者を分ける二分法的発想が近代以降の人間の自己理解を作ってきたことはフーコー以来多くの研究が明らかにしてきました。正常な自己というアイデンティティが成立するためには、正常ではないもの、自己とは違うものが分離されなくてはなりません。狂気や病や外国人や異人種のような「異常」な他者を隔離するための施設が病院や監獄、学校や軍隊といった監禁群島でした。同様のメカニズムは動物にもあてはまります。動物論的転回は、動物や自然を反理性的な他者として排除することで形成された人間のアイデンティティを問い直します。その課題は、第一に人間の絶対的な地位を疑い、人間中心主義に挑戦することでした。次に、排他的ではない人間と動物の結びつきを考えることでした。

よって人間と動物の関係への注目が、転回以後の動物研究の重要なテーマとなります。社会史においては、動物は下からの抵抗の側に位置付けられました。しかし、それは動物に人間の社会と同様の構造を適用しており、動物の擬人化でした。重要なのはむしろ、動物に向けられた共感のまなざしは、なぜ、どのように作られたのか、また動物に抵抗の役割を与えることにより、人間はどのようにそこから自らを区別することができたのかという問いです。人間と動物の関係史の記念碑的著作であるハリエット・リトヴォの『階級としての動物』から引用します。

十九世紀イングランドにおける動物にまつわる多くのさまざまな言説は、ただひとつのより大きなまとまりを成していて、それは支配と搾取という中心テーマを、論じるとともに例証していた。人間の力を賛美するとともにその支配を拡大するレトリックにとって、動物はまさにおあつらえ向きの主題だった。なによりも、動物はこのテーマを表現すると同時に隠蔽してくれるのだから。……そうした動物について語ることによって、支配の企てを直接口に出したくない、口に出せないというひとびとは、間接的にそれを実現する方法が与えられたのである。(ハリエット・リトヴォ, 三好みゆき訳『階級としての動物 ヴィクトリア時代の英国人と動物たち』(国文社, 2001), 14・5 頁.)

動物について語ることは、人間と動物の関係を作っていくプロセスでした。動物を凶暴な獣や可哀想な犠牲者として語るにより、人間はそうではない特別な立場、そのように動物を語るという人間にしかできない特権を手に入れます。それは直接の抑圧ではないとしても、動物に対する人間の支配的優位を保証しました。近代における人間と自然の関係に再注目することで、共感やノスタルジアと分断や排除が混ざりあっていた動物観を詳細に検討し、そこから反射的に構築された人間の自己認識の特徴を抽出した研究としては、キース・トマス『自然と人間』、ジェイムズ・ターナー『動物への配慮』、Kathleen Kete, *The Beast in the Boudoir*などが挙げられます。これらの研究は、再度ファッジのことばを借りれば、「全体論的な歴史 (holistic history)」であり、人間による動物の一方的な操作ではなく、両者の間にあった相互的な影響を考えました。大胆な言い方をすれば、動物の存在が人間の自己形成にとって不可欠であり、動物の他者化が人間の歴史にとって決定的な意味を持っていたといってもいいでしょう。人間の中心性は絶対視されがちでしたが、実は動物との差異化によって初めて導出された恣意的で不安定な力に過ぎないことが明らかになりました。(キース・トマス, 山内昶監訳『人間と自然界 近代イギリスにおける自然観の変遷』法政大学出版局, 1989; ジェイムズ・ターナー, 斎藤九一訳『動物への配慮 ヴィクトリア時代精神における動物・痛み・人間性』法政大学出版局, 1994; Kathleen Kete, *The Beast in the Boudoir: Petkeeping in Nineteenth-Century Paris* (Berkeley: University of California Press, 1995).)

こうした動物論的転回以降の関係史にとって、大きな武器であり、同時に弱点となったのは言語の問題でした。人間と動物の関係を考えるための方法論は、人間が動物を語った言語の精緻な読解でした。関係史が取り上げたのは、マテリアルな動物ではなくレトリカルな動物、たとえば生物学、獣医学、博物学などの科学の知識、農業や畜産に従事した人々の記録、ペット飼育や動物愛護のパンフレットやマニュアル類など様々な立場の多様な関心から書かれた文書中に現れた動物たちでした。リトヴォはこうに説明します。

有形の動物が人間の意のままにされていたように、レトリックのなかの動物も、なにかにつけて操作されていた。物的な世界における動物の立場と言説の宇宙における動物の立場が、互いに互いを強固にしていたのである。・・・こうした動物は、筋力という意味では強かったかもしれないが、田舎の牧草地にいる雄牛や、巡回動物園のライオンや、さらにはアフリカの平原やインドの山地で狩猟家に追跡される猛獣が無力であったように、明らかに無力であった。そしてレトリックの領域においては、動物たちはさらにいっそう無力であった。言説は必然的に現実を構造化しなおし新たに作り直す、ということに言説の持つ力が存在するとしたら、人間の場合には相手の解釈に対抗する解釈を提示することができるので、言説の力の行使には必然的に限度がある。だが動物は言い返すことができないのだ。(『階級としての動物』, 14-5 頁.)

この方法論は、レトリックによって作られ、再構成される動物の現実を解き明かすことに成功しました。一方でリトヴォが認めているように、動物は語られることはあっても、自ら語ることはありません。その意味でレトリカルな動物は無力です。

言説をめぐる語るものと語られるものの差は、動物にとどまらず歴史学全般の重要な課題です。この点については、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』が提起した西洋と東洋の関係の非対称性がよく知られています。オリентとは自然の実体ではなく、オリентに関する知や言説の総体としてのオリエンタリズムが作り上げた虚構でした。マルクスの『レイ・ボナパルトのブリュメール十八日』にならえば、「もしオリентがみずから表象できるものなら実際にそうしていることだろう。オリентにはそれができないからこそ、表象という仕事、西洋のために、またやむをえず哀れな東洋のためになされるのだ」ということになります（E.W.サイード、今沢紀子訳『オリエンタリズム』（平凡社ライブラリー、1993）、22頁）。何か別のものによって表される表象のメカニズムはここでは代表や代弁と同じ意味になります。オリエンタリズムは正確な真実ではなく、オリентから遠く隔たっていましたが、にもかかわらず、あるいはだからこそ、オリентを再生産して、その神話が一般的な知識として流通することになりました。西洋が主体的で自ら語ることができる男性だとすれば、オリентは受動的で自ら語れない女性として位置付けられます。オリエンタリズムの特徴はこの不均衡な力学でした。

表象＝代弁の政治学は、ポストコロニアル・スタディーズとサバルタン・スタディーズによってさらに深く検討されました。ガヤトリ・スピヴァクの『サバルタンは語ることができるか』が着目したのは、インドのサティの風習により夫を追って殉死した女性でした。彼女は何も語らずに火に身を投じました。彼女の考えや行動を述べたことばは残されていません。代わりに、彼女たちには第三者によって説明が与えられてきました。一つはインドを植民地化した啓蒙的なヨーロッパ人によるもので、文明的な白人男性により野蛮なインドの男から救い込まれる可哀想な女性たち、というレトリックでした。もう一つは、それに対するインド側からの反発であり、彼女たちは夫に殉じることを自ら望んでいたとされます。どちらにしても、植民地の、カースト制度の中の、女性という何重にも抑圧された人は、誰かによって代弁されていて、自身を語ることは許されていません。サバルタンの女性たちは「歴史的に沈黙させられてきた」のです。（G・C・スピヴァク、上村忠男訳『サバルタンは語るすることができるか』（みすず書房、1998）、74頁。）

よって彼女たちについて考えるとき、歴史家は難しい立場に立たされます。たとえ彼女たちをサティの束縛から救出しようとする善意があったとしても、彼女たちを代弁することには変わりありません。帝国の権威ある大学で高等教育を受けた知識人によるサバルタンの代弁は、両者の間にある権力の大きな差に基づいていて、その歪な構造を温存します。知識人たちの温情は彼女たちの解放を実現するわけではないのです。スピヴァクはこのとき知識人に求められる倫理として、自らの特権性を自覚しつつ「忘れ去る」ことが必要だと言います。従軍慰安婦論争に通じるものを思い出す人もいるかもしれません。第二次世界大戦時の日本軍の従軍慰安婦たちの記憶が戦後長い時間を経て浮上したとき、それを真摯に受け止める歴史家とそれを否定する歴史修正主義者との間に論争が起こりました。彼女たちの告発を切り捨てた自由主義史観のドグマティックな誤りは言うまでもないですが、一方で慰安婦の側に寄り添おうとした良心的な歴史家たちもまた、代弁する権力に無自覚でした。歴史家たちは埋もれていた公文書を

発掘し、日本軍による慰安所設置への組織的な関与を明らかにしました。その成果は高く評価されますが、実証主義史学においては、歴史を書くことは訓練を受けた知識人の役割であり、それが依拠するのは公文書を第一とする真正さによって裏付けられた史料です。被害者の語りは二次的な、信用度の低い証拠です。しかし、上野千鶴子が批判したように、「当事者の現実を離れて、ある歴史的事実を「あるがままに」第三者の立場から「判定」できる、と考えるところに実証史家の傲慢がある」のです。(上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』(青土社, 1998), 157 頁.)

正史からはこぼれおちる弱い個々の語りを掬い取るためにはオーラルヒストリーが有効です。もちろんそれにも証言の非一貫性や忘却や改変などの難問がありますが、オーラルヒストリーは沈黙を強いられてきた当事者たちの語りから、ずっと存在しながら見過ごされてきた現実をあらわにし、トラウマとして封印された痛みや苦しみから歴史を書き直しました。経験を再現前させることもまた表象の機能の一つです。しかし、沈黙の歴史の困難は、動物においてさらに先鋭化します。それは人間と同じ言語を共有しません。彼らの歴史は、文字としても語りとしても伝えられません。レトリカルな動物を読み解き、整理して、歴史を書くことはできます。しかし、レトリックではない現実面、いわば「生きている動物」の存在は軽んじられます。人間と動物の関係史は、人間の特権性を相対化することに成功しましたが、なお動物を代弁する以外の方法を模索する余地があります。

4. 動物のエージェンシー

自らを語ることのない動物を代弁することなくその歴史を書くという難題に取り組むとき、エージェンシーという概念が再度脚光を浴びることになりました。歴史学におけるエージェンシーの解釈をまとめたウォルター・ジョンソンによれば、それは社会史の根本にあった概念でした (Walter Johnson, "On Agency," *Journal of Social History* 37.1 (Autumn, 2003): 113-124.)。労働者階級を資本家による搾取という犠牲者像から解放し、彼らの自立した文化を強調した社会史にとって、エージェンシーとは労働者が持つ自主的な行動の証でした。それは外部に縛られることなく独立して考え、決定し、行動する能動的な意思のことです。それはまた、人間と動物を分けるものでもありました。人間のみが自由意志を持ち、理性により判断するエージェントになれるとしたら、対照的に、そのような自覚も考える能力もない動物はエージェンシーを欠いていることになります。人間は意思により世界を変えることができますが、動物は本能のままに所与の現実にとどまります。エージェンシーを人間が持つ人間らしさの根拠として考えるとしたら、動物はそれを認められないか、あるいは抵抗の主体という擬人化された役割を与えられることになります。動物のエージェンシーは社会史の枠組みには馴染みません。

しかし、文化論的転回や構築主義が指摘したように、人間の主体性とは人間が信じるほど確固としたものではありません。人の思考やふるまいは個人の能動的な選択によるものではなく、訓練を通して内面化された規範に大きく左右されます。自己の意思だと考えていたものは、実

は他者の視線を介して習得したものであり、動物を他者とすることで人間の自己理解が形成されたように、人間と主体とは単独で成り立つわけではありません。つまり、意識や意図とエージェンシーは一体ではないのです。無意識であったとしても、意図せざるものだったとしても、それでもなんらかの変化や影響を生んだとしたら、それはエージェンシーの現れです。そう考えると、社会史の戦闘的な姿勢とは異なりますが、より柔軟で応用的な主体のあり方を構想することができます。

新しいエージェンシーの理解は、人類学により提唱されました。ブルーノ・ラトゥールの「アクター・ネットワーク理論 (ANT)」では、エージェンシーは人間だけではなく非人称のモノにまで拡張されます。ラトゥールによれば、近代とは自然と文化を切断することで作られた虚構です。自然から文化を切り離すのと同じように、身体から理性を解放し、動物に対して人間を優越させました。このデカルト的な二分法では、人が中心にあり、人以外のものは辺境に追いやられます。しかし、それら是对極にあるのではなく、そのように配置されることで人間の特別さという神話が生まれ定着したのです。人も、動物も、モノも、すべて単体で存在しているのではなく、それら複数の様々なアクターが織りなす関係の網の中にあります。アクターがネットワークを形成し、ネットワークがアクターを変化させます。アクター間の相互作用に注目すると、エージェンシーは人間の独占物ではありません。(Bruno Latour, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network Theory* (New York: Oxford University Press, 2005).)

モノに注目するマテリアル・カルチャーでも同様の議論がされました。ビル・ブラウンによる「モノ理論 (thing theory)」では、存在に気づかれることもない没個性なオブジェクトと、客体を超えて人に働きかける力を持つモノを区別します。たとえば、窓は通常であれば見られることはなく、無色透明の目立たないオブジェクトです。しかし、いったんその単純な役割が停止したら、人はそれを意識せざるをえません。もし窓にヒビが入って視界を奪われたら、人と窓の関係は変化します。このとき、窓を通して外を見るのではなく、窓自体が見られるようになり、モノとしての性質を発揮します (Bill Brown, "Thing Theory," *Critical Inquiry* 28.1 (2001): 1-22.)。

ANT やモノ理論を参考にすると、エージェンシーとは、差異を作り、他のエージェントに変化をもたらす能力のことです。これは人間のみに許された特権的な主体性とは異なります。自由意志や自己省察や目的合理的な意図を必要としません。動物もまたエージェンシーを持つのです。エージェンシーの概念を用いることで、人間という唯一の歴史的な主体は、動物や人間を含むネットワーク上の相対的なものに変質します。それは複数の、多発的な、偶然で、コントロールできない関係、すなわちアサンブラージュの一部です。エージェンシーとは関係の産物であり、ネットワークの中で作られ、周囲の環境と常に反響します。それはドゥルーズとガタリのことばを借りれば「動物への生成変化」です。

近年では、こうしたエージェンシーの理解を取り入れ、対立ではなく、人間と動物の間の相互的な関係を考える研究が発表されています。その理論家の一人であるヴァンシアヌ・デブレによれば、動物であることはどのようなことかという問いに人は答えることはできませんが、

動物と共にいることについては書くことができます。「すべてのエージェンシーとはインターエージェンシーなのであり、力と力が通じ合うアジャンスマン（agencement）抜きのエージェンシーはありえない」のです（Vinciane Despret, “The Becomings of Subjectivity in Animal Worlds,” *Subjectivity* 23 (2008): 123-39; “From Secret Agents to Interagency,” *History and Theory* 54.4 (December 2013): 29-44.）。エージェンシーは単独で存在するのではなく関係性の中にある以上、時には依存的なエージェンシーもありえますし、合体的なハイブリッドなエージェンシーもありうるでしょう。

環境史やグローバル・ヒストリーなど、人間の日常的な活動を大きく超える広大な時間・空間へと拡大された歴史学にエージェンシーの一例を見つけることができます。ヨーロッパによる新大陸の侵略と征服においては、人間だけでなく動物や環境要因が大きな働きをしました。アメリカ大陸は外部から隔絶した閉鎖的な生態系であり、大型哺乳類がいないなどヨーロッパの動植物相との間にニッチ（生態的地位）のズレがありました。そのことがヨーロッパからアメリカへの動物の移入を容易にして、アメリカのヨーロッパ化を促進しました。また、アメリカの先住民に壊滅的な被害をもたらした天然痘などの病原菌は、意図して持ち込まれたわけではありませんが、ANTに従えばアクターであり、そのエージェンシーが歴史的な大変動を引き起こしたと言えます。ヴァージニア・D・アンダーソンによれば、新大陸の植民地化において家畜は環境だけでなく人間にも大きな変化を与えました。牛、馬、豚などの家畜を飼育するには広大な土地を必要とします。そのために入植者達は周辺の自然を開発し、植民地を広げ、結果、インディアンとの間に緊張を招きました。家畜の移入は、経済的だけでなく文化的な競争でもありました。というのも、牧畜は所有権の確立と保護と一体であり、一頭一頭の家畜は、自然のなかに生きる独立した動物ではなく、個人の持ち物とされます。飼育のためには土地を区切り、柵で囲い、動物の逃亡を防ぐと共に、余所者を中に入れないように管理します。土地の私的所有は独占的な権利であり、所有者以外を排除します。これは自然を人間が占有するのではなく他の生物と共生し、多くの資産を部族で共有してきたインディアンの文化と相入れないものでした。こうして家畜の導入は、新大陸の生態系を変えただけでなく、ヨーロッパ人とインディアンの関係に影響し、力による土地の支配と収奪を進める一因になりました。これは牛や馬の意思ではありません。しかし、動物が新大陸の多アクター間のネットワークの中でそのような作用したのです。（Virginia DeJohn Anderson, *Creatures of Empire: How Domestic Animals Transformed Early America* (New York: Oxford University Press, 2006).)

人間と動物の相互的な関係についてはダナ・ハラウェイの議論も参考になります。ハラウェイは1980年代の「サイボーグ宣言」によって、身体をモノや技術によって拡張したキメラ的な人のあり方を模索しました。サイボーグは、生命と機械、身体と精神、男性と女性、人間と動物のような二分法的思考を乗り越え、一貫して統一された自己という近代の理想に代わり、複数の分裂していて常に変化する自己に変身します。そうだとしたら、ハラウェイが人間と人間ならざるものの間に種を超えて主体と客体が区別不可能なたちで混じり合うアイデンティティを想像するのは想像に難くありません。21世紀の「伴侶種宣言」において、ハラウェイは犬を念頭に伴侶種（companion species）と人間関係を再定義します。それは言語によ

らないコミュニケーション、訓練やアジリティ競技で共に動くこと、さらには触覚や嗅覚や味覚による相互理解などからなります。伴侶種とは「重要な他者 (significant otherness)」です。それは、一面では家族のように身近にあってかけがえのない存在であり、同時に決して完全に一致することはない「相互に著しく他者」な存在でもあります。この二重性を理解するとき、動物を搾取するのでもなく、代弁するのでもなく、擬人化するのでもない「共同的な親族関係 (joint kinship)」となります。人間も犬もこの関係性の中においてエージェンシーを獲得するのです(ダナ・ハラウェイ、永野文香訳『伴侶種宣言 犬と人の「重要な他者性」』(以文社, 2013); ハラウェイ、高橋さきの訳『犬と人が出会うとき 異種協働のポリティクス』(青土社, 2013).).

5. おわりに

これまで見てきたように、動物の歴史への関心は 20 世紀後半以降、革新と批判を繰り返しながら発展し、近年は大きな広がりを見せるようになりました。社会史において動物は抑圧に抵抗する力として「下からの歴史」の一翼を担いました。その単純なモデルを見直した人間と動物の関係史では、動物を語るレトリックを分析することで、動物の他者化と人間の特権化が明らかにされました。しかし、人間が動物を代弁する表象の働きは、動物を沈黙させることになりました。言語によって作られた自己という構築主義の見直しにともない、レトリカルな動物から再びマテリアルな動物へと関心は移り、現実の動物の生きられた経験を見捨てることはできなくなりました。その点で歴史学は、人間の人間らしさが自明ではなくなったポストヒューマンや、倫理を重視する環境人文学や、存在論的転回以降の人類学と多くを共有します。人間は中心性を失い、動物やモノなどそこに実際に存在する多種多様なものたちがとり結ぶ不定形のネットワークに組み込まれました。それらのアクターたちは相互に変化を起こす力、すなわちエージェンシーを持ちます。ここまでの動物研究の展開を踏まえて、最初の問いに戻りましょう。動物を操作することも代弁することもなく動物の歴史を書くことは可能でしょうか。それは極めて難しいことです。少なくとも、文書史料に基づく実証的な歴史にとどまる限りは不可能でしょう。動物の歴史を構想するとすれば、それはエージェンシーとエージェンシーの間においてなのです。

[付記] 本稿は、文化社会学部第 2 回研究交流会 (2018 年 5 月 30 日、於 14 号館 405 教室) で行った報告を元に、大幅に修正を加えた。